

自分にとっての平和とは

岸上長虎

NIST International School

夢の中で過ごす時間があまりにも幸せで、人はそこにとどまりたくなる。しかし時には、残酷に目を向け、その夢を現実に変えなければならない。

ある日突然、私はその幸せの中で何かが砕け散る轟音を耳にした。それは「デパートで人が銃で撃たれた」という知らせだった。その瞬間、「平和」という言葉は遠くのニュースではなく、自分の足元から崩れうるものだと知った。

私は今、タイで暮らしている。微笑みの国と呼ばれるほど、人々は温かく、のんびりとした空気に包まれている。しかし、その表面の下には、時折、鋭く冷たい現実が顔をのぞかせる。2023年10月3日、悲劇が起こった。あの日の銃撃事件では、何の罪もない人々が突然命を奪われ、街は一瞬で恐怖と混乱に覆われた。昨日まで笑顔で日常を過ごしていた人々が、翌日にはもうこの世界にいない、その現実はあまりにも残酷だった。

別の日には、バスケットコートで、近くでマリファナを吸っていた男性に突然怒鳴られ、理由もなくケンカを売られたこともあった。燦々と太陽が肌を焼く中、意味のない怒りにさらされる恐怖と戸惑い。「なぜ人はこんなことで争うのだろう」。その疑問は今も私の中で答えを探し続けている。

これらの出来事から、私は学んだ。平和は偶然に訪れるものではない。それは、誰かの努力と小さな思いやりの積み重ねによって築かれるものだ。法律や制度は土台になるが、その上にどんな世界が築かれるかは、私たち一人ひとりの心にかかっている。

私が描く理想の平和な世界は、国籍や言葉が違ってても互いを理解しようとする姿勢が当たり前で存在する場所だ。街角で目が合えば自然に微笑みを交わし合える。銃声や薬物の匂いに怯えることなく、子どもたちが楽しく公園で夢を語り合える。怒りではなく対話を、疑いではなく信頼を選ぶ社会。そんな社会が世界中に満ちたとき、初めて本当の意味での「平和」が訪れると信じている。

けれど、その未来は遠くの誰かが用意してくれるわけではない。私ができるのは、今日の小さな一歩を踏み出すこと。隣にいる人を理解しようと耳を傾けること。挨拶の一言、差し伸べる手、小さな勇気、そうした行動が水面に落ちた雫のように広がり、やがて世界の形を変える波となる。銃声が響いたあの日から、私は信じている。平和は奇跡ではなく、私たちの選択から生まれるのだ。